九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『辨篇突集』について ： 『旅寝論』の一異本

大内, 初夫

https://doi.org/10.15017/12318

出版情報：語文研究. 12, pp.23-31, 1961-04-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『弁篇突集』について

――『旅寝論』の一異本――

大内初夫

一

師翁芭蕉から西三十三ケ国の俳諧奉行に擬せられ、篤い信頼を得ていた向井去来の手になる『旅寝論』は、同じ去来の『去来抄』や土芳の『三冊子』等と共に、蕉門俳論書として重要視され、芭蕉俳諧について論ずる場合、欠くことの出来ない大切な俳論書であることは、今更ここに喋々するまでもなかろう。この『旅寝論』の成立事情については、去来の自序に、

長崎といふ所に旅ねしけるに、都の書林重勝がもとより此比の集なりとて、浪花（化が正しい）の続ありそ、風国が泊船、許六が篇突、三ツの集を送る。或日此浦の卯七・魯町などゝ共に是を披けるに、外の二ツは発句連誹を乗せられ、篇突集は此道のをしへ工夫の便りをしるして、執行の人の助すくなからず。然共まゝうたがはしき筋も見え侍れば、彼此難諫（陳が正しい）をおこして一つの書にとゞむ。（岩波文庫本）

とあって明らかなごとく、元禄十一年、当時長崎に旅寝中の去来の許へ、京の書肆井筒屋から他の二俳書と共に送付された『篇突集』の所説に対し、難陳の書として『旅寝論』は書かれたものであった。だが去来、許六の両者の間には、元禄八年正月廿九日付許六宛去来書簡（注1）によると、既にこの頃、発句等について論じた手紙が取りかわされており、本書簡中にも『旅寝論』や『去来抄』に記載されている俳話と関連を有するものなども見出される。又元禄十年から十一年にかけては、所謂『俳諧問答』所収の論書の応酬があり、そこで取りあげられたもののいくつかは、『篇突』に季題中心の形で組み入れられている。従って去来による『旅寝論』の執筆は、これまでの数次にわたる論書の応酬の延長として見ることが出来るし、そうした論書の積み重ねが、本書の成立を容易ならしめたと

もいえよう。なお『篇突』の許六の論は、表面的には芭蕉の説を掲げながらも、甚だ許六的な「一片（ひとかた）」の見解が多く、中正穏健な去来としては、全く承服しかねるものであったために、卯七・魯町等長崎の連中の質疑に応えて、爰に「日頃聞置たる師説をうしろ立」として、『篇突』の敍述を追って自己の所見を披瀝したのであった。（注2）

ところで、本書は一般に『旅寝論』の名で知られているが、最も古い板本は宝暦十一年に桃鏡によって『去来湖東問答』と題して上梓されているし、又、伝本は書名がまちまちであって、従って板本『旅寝論』の跋文に、「旅寝論と名付しを」と重厚があたかも去来の命名のごとく記しているのも疑わしい。「あるいは去来自身には、何とも題名を付してなかったかもしれない」（岩波文庫『去来抄・三冊子・旅寝論』解説）と潁原博士が述べておられるごとく、恐らく原本には著者去来によって題名が付されていなかったのであろう。そうでなければ諸伝本のあの多くの異った題名は理解し難いのである。しかも草稿本の一部が大東急記念文庫に所蔵されている『去来抄』に比して、『旅寝論』は去来自筆本が全く知られず、その為、諸伝本によって去来原著の形を想定する外はないが、本書が成立してから最初の刊本『湖東問答』が出版されるまで六十年、『旅寝論』が刊行されるまで八十年、広く写本によって流布したために、伝本も多く、又各伝本ごとにかなり語句に出入りがあって、『旅寝論』の校本作製の作業は必ずしも容易でないと思われる。

『旅寝論』の諸本の研究は故山崎喜好教授が手がけておられた。同教授の「『旅寝論』の調査」（関西大学『国文学』第二号）に『旅寝論』の伝本として次のようなものがあげられている。

(1)落柿舎誹論（内題、落柿舎旅寝誹論）
（注、九大図書館蔵。美濃の怒風所持本を享保十三年に居鳳（注3）が筆写したもので、今日知られる写本中では最も古い。岩波文庫翻刻本。）

(2)去来俳諧評判
（注、京大研究室蔵。福山の雨声庵素浅所持本を寛保二年に時時庵宜応が写し、更にそれを天明二年に李朝が転写したもの。）

(3)去来伝
（注、京大研究室蔵。風葉の旧蔵本で、文化文政を下らぬ頃の写本といわれる。）

(4)去来湖東問答
（注、伊賀の服部利水から江戸の松村伊兵衛に伝えられたものを、桃鏡が宝暦十一年に江戸で出版したもの。「俳諧文庫」翻刻本。）

(5)旅寝論
（注、重厚が筑前植木の湖桂の家で見出した本を、安永七年に京で上梓したもの。「俳書大系」翻刻本。）

(6)落柿舎去来評
（注、天理図書館蔵。筆写年時など未詳とのことである。）

(7)書名不詳本
（注。岡田利兵衛氏蔵。筆写年時は明らかでないが、かなり古いものとのことである。）

(8)篇突論

（注、中村改一郎氏蔵。許六系の写本を逸丸が筆写したもので、筆写年時未詳。）

(9)許去論評解

（注、中村改一郎氏蔵。専宗寺蔵。本書は正しくは『旅寝論』の異本ではなく、享保二年、豊後日田の鳳岡が『旅寝論』を論難して著わしたもの。本文中に去来の説として『旅寝論』が相当引用されているので校合にも役立つ。）

以上のごときものである。

なおこの他に筆者の管見に入った『旅寝論』の写本には次のごときものがある。

○落柿舎去来俳諧評判

三原図書館蔵で、昭和三十年の広島大学での俳文学会の展覧会にも出陳されたもの。涼俳の『枯野問答』と合冊になっているが、内表紙裏に「倚松」の印があり、備後三原の三好倚松が宝暦八年三月下旬に筆写したもの。倚松は野坡門人。前掲(2)『去来俳諧評判』と同系統の写本である。

○篇突論

天理図書館蔵。奥書によると採茶庵二世梅人の所蔵本を、寛政十二年初夏に文莫居主人が写したもの。

○五老井篇突集難陳

東大洒竹文庫蔵。二世冬映の門人朱明が享和元年六月に筆写したもの。

○弁篇突集

本庄弘直氏蔵。筆者が本稿で特に取りあげて紹介しようと思うのはこの『弁篇突集』である。

さて『旅寝論』が、安永の頃に『弁篇突』の題名で、かなり広く行われていたらしいことは、板本『旅寝論』の重厚の跋文に、

旅寝論と名付しを、いつしか世につたへて、弁篇突と題してこに写し、かしこにもち伝ふといへども、落字あるは誤字の多きをうれふ。

と記していて明らかである。又この重厚の言説を裏付けるように、久留米の蘭亮著『船はし』に「落柿舎去来が書る弁篇突集を見るに…」として、その一節が引用されているし、京の風之著『誹諧耳底記』にも「たゞ去来の弁篇突は見るべきものなり。」と見える。蘭亮・風之共に野坡門人であるが、或は野坡門に『弁篇突』と題する写本が伝えられていたのであろうか。潁原博士の『旅寝論』（岩波文庫）の解説には「筆者もかって『難篇突』と題した一写本を寓目した事がある。」とあるが『難篇突』でない『弁篇突』については詳しいことは見えないし、山崎教授も前掲のごとく『弁篇突』を全くあげていられない。『弁篇突』について重厚は落字や誤字が多いと記しているが、当の重厚が板行した『旅寝論』自身相当に脱文を有しているし、最古の写本九大本も亦脱文や誤字がある。他の板本『湖東問答』においても同様で、現在の『旅寝論』の伝本はいずれも誤字や脱文を有している。ところで、従来知られていた『旅寝論』の諸本とこの『弁篇突』本とを比べて見ると、そこには今迄知られなかった語句や文章の異同が見出される。しかもそれらは後述のごとく相当に重要なものと考えられるので、一応この『弁篇突』なるものについて考えてみる必要があろうと思う。

さて、本庄家所蔵の『弁篇突』は、半紙本一冊、本文と同じ紙を表紙にしたものの中央に「弁篇突集　去来撰」と記されてあり、又巻末に「秀山書」とあるが、本文もこれと同筆で、その筆跡から考えて塩足秀山の筆写にかかわるものであることは明白である。秀山は筑後塩足の庄屋塩足宇左衛門清瑞の長男であるが、父宇左衛門は俳号を丈日堂市山といい、蕉門野坡の門弟で、野坡も屢々丈日堂を訪れ、ここに旅寝を重ねている。市山の撰集には、享保二年、雪刀、秋虎等と共編の『百曲』や、元文五年、野坡追善の『むすび塚集』等があり、彼は筑後俳壇中での最有力者であった。秀山は宝永七年の出生で、通称を宇七郎清俊といい、元文四年に帶刀を許され、寛延二年には同地方の大庄屋の役をつとめ、天明六年三月二十一日、七十七才で歿している。彼も父市山と同様に俳諧を嗜み晩年には諸九尼などとも交遊があった。ところでこの『弁篇突』は筆写の年時がなく、何時頃の写本か不明であるが、秀山五十才代の筆写としても宝暦年中のものということになる。

二

次にこの『弁篇突』本と『旅寝論』の他の伝本との異同を眺めることにしようと思うが、九大本『旅寝論』と校合してみると、異同ある箇所が凡そ三百五十箇所にのぼるので、到底この小論ではその全部の校異を掲げることが出来ない。で、ここではこれまで知られていた『旅寝論』の諸本と、『弁篇突』との間に特に相違があり、問題となる部分のみを掲出して、検討を加えることにする。但し、比較する場合、先ず最も古い写本九大本（以下**九本**と略称）により、他本は問題のある時に適宜引用する（九本の下の数字は岩波文庫の『旅寝論』の頁数を示す。）。

（一）（**九本** 160頁）或日此浦の卯七・魯町などゝ共に是を披けるに……
（**弁篇突**）ある日此浦の卯七・魯町・素行・牡年等と共にこれをひらきけるに……

『去来俳諧評判』（以下**評本**と略称）『旅寝論』（以下**板本**と略称）『湖東問答』（以下**湖本**と略称）等他本すべて九本と同じで、卯七・魯町の二人の名をあげているに過ぎないのに、『弁篇突』（以下**弁本**と略称）は卯七・魯町の他に素行・牡年の名を並べている。これらの人のうち、卯七は去来の義理の従兄弟寳田佐平次、魯町は去来の実弟向井元成、素行は去来の再従兄弟久米調内、牡年は去来の実弟久米利文で、いずれも去来に俳諧の指導を仰いでいた長崎在住の血縁の人々である。それに牡年は『去来抄』に「牡年曰」としてその質問が見えるのであるから、ここに素行・牡年の名が列記されていてもおかしくはない。多分初め四名の名を列挙したが、煩わしいので俳人としてさほど有名でない素行・牡年の名を省いたものか。

（二）（**九本** 160頁）句におゐて其しづかなる事丈草に及ばず、其はなやかなる事其角に及ばず、軽き事野坡に及ばず、あだなる事土芳に及ばず、たくみなる事正秀に及がたし。
（**弁本**）句におゐて其静成事丈草に及ず、其花やか成事其角に及ず、軽事野坡に及ず、あだ成事土芳に及ず、巧成事許六に及ばず、ほどけたる事支考におよばず、奇成事正秀に及がたし。

従来の諸本に於いて、この部分が一番相違のある箇所で、九本は丈草・其角・野坡・土芳・正秀の五人の評が見える。板本も九本に同じである。一方弁本はこれに許六・支考の二名が加わっているが、湖本・評本・岡田本・篇突論（逸丸本・天理本）・篇突集難陳・去来伝・落柿舎去来評などはこれと同じである。山崎教授の前記論文での推定は、許六・支考が加わっているものが草稿本で、二人が除かれているものが成稿本であるとのことである。そして、本書はもともと公表を予想して執筆したものではなかった故、加えるもけずるも遠慮気がねはいらず、草稿では許六・支考を載せていたが、文中に出る他の俳人以上には二人の癖を尊重出来なかったので、成稿では除いたものであろうと論じておられる。

（三）（**九本**・161頁）元禄十二己卯三月日

（**弁本**）己卯の年三月廿一日

序文の日付であるが、他本はすべて九本と同じである。その点、弁本の廿一日の日付は他本では知られなかったもので、『旅寝論』の成立した日が明瞭になって有難い。

次に本文に入って、先ず「或人問ていはく……」（九本）「問云…」（湖本・評本。板本は「問云」がなく、「許六の…」で始まる。）の形で『篇突』についての質問が提出され、それに大体「去来答曰…」の形で去来の回答が述べられている。しかし質問者の名前を記している『去来抄』と違って、これまで知られていた『旅寝論』の諸本では、質問者の名前は記されてないので、誰の問いかは明らかでない。ところが辨本だけは、全部にわたってではないが、質問者の名前があげられている。その部分を便宜的に図示すると、

（四）

頁	行	九大本（岩波文庫）	弁篇突本	備考
162	1	或人問ていはく、許六の篇突集を…	卯七問曰…	湖本・評本「問曰」板本「許六の…」から始まる。
〃	10	問曰、遠国の歳旦など…	又問曰…	板本。評本は九本に同じ。湖本「問」。（以下同じ）
164	2	問ていはく、同集に…	魯町問曰…	
〃	15	問ていはく、歳旦無季の各…	素行問曰…	
166	6	問曰、脇第三の格式…	牡年問曰…	
168	8	問曰、鶯と云句は…	卯七問曰…	
172	3	問て曰く、ぼたんを…	卯七問曰…	

のごとくなっている。これは弁本と他の伝本との著しい相違であろう。

（五）（**九本**・168頁）今其角が鶯を見るに、日比其姿を覚て句に望、意を畫、屏なんどを見て作したる句也と難じらるゝも尤也。

（**湖本**）今其角が鶯を見るに、日比其姿を覚て句に望み、意を畫、屏なんどのとく作したる句なり。

（**板本**）今其角が鶯を見るに、日比その姿を覚て、句に望む意を畫、屏なんどをみて作したる句也と難じらるゝも尤也。

（**評本**）今其角が鶯の句を見るに、日比其姿を覚て句に望ミ、意を盂、屏なんどを見て作したる句なりと難ぜらるゝも尤なり。

（弁本）今其角が鶯を見るに、日比其姿を覚へて句に望の意を用ひず作したりと見ゆ。深川の連衆、此句ハ畵屏なんどを見て作したる句なりと難じらるゝも尤也。

この部分、「畵屏」を九本「畫屏」、評本「盃屏」にそれぞれ誤っているが、しかしそれにしても意味の通じ難い文である。ところが弁本は「…意を」の次に「用ひず作したりと見ゆ。深川の連衆、此句ハ」の詞があり、他本より詳しい。今、弁本の「句に望の意を…」を他本を参考して「句に望み、意を…」と改めると、甚だ意味がよく通じることになる。恐らく弁本以外の諸本すべて「用ひず作し…此句ハ」の一行を脱しているものと考えられる。

（六）（九本・178四）是等はあながち忘るべき程の事は侍らね共、名人の心を用ひ給ふ事見るべし。

（湖本）是等はあながちしるすべきほどの事には侍らねど、名人の心を用ひ給ふ事を見るべし。

（板本）是らはあながち語るべきほどの事には侍らねども、名人の心を用ひ給ふ事見るべし。

（評本）是はあながちにしかるべき程の事は侍らね共、名人の心を用ひ給事見えるべし。

（弁本）此等は等類にあながちいむべき程の事にも侍らねども、名人の心を用ひ給ふ事見るべし。

「清滝や」の句について述べた部分で、諸本に異同のあるところである。しかも諸本のままでは文意がおかしかったり、解釈が無理になったりするところであって、或は誤字・脱字があるのではないかと考えていたが、弁本だとまことに無理なく理解出来るのである。

（七）この部分も弁本を以てよしとすべきであろう。

（九本・180四）但其時心両端に侍き。若くるしからぬ方に評せば大幸ならん。後悔の余りに今爰にかたりぬ。

（板本）但其時こゝろ両端に侍りき。若くにからぬかたに評せば大幸ならん。後悔の余り今爰に去来語る。

（弁本）但時心両端に侍き。もしくるしからぬかたに評をせば大幸ならん。後悔のあやまり今爰にかたりぬ。人の好句を叨にそしらんは尤罪ふかゝるべし。

「門口や」の句について述べた部分である。湖本・評本は九本に同じ。板本も文末が「去来語る」となっている程度の違いであるが、弁本には「かたりぬ。」の次に他本にない「人の好句を…」の一文が付いて詳しい。

（八）（九本・180四）又発句は只一足の上にあたらしき事を一宛云のきしたる分にはあらず。

（湖本）又発句は只一案じの上に新しき事を一ッづゝ言のきしたる分にはあらず。

（弁本）またホ句はたゞ一物〳〵の上に新しき事を一ッ宛云退にしたる分にはあらず。

等類の事について述べたところである。評本は「一あし」とあるが、「一足」「一案じ」「一物〳〵」のいずれが正しいのであろうか。

（九）（九本 181四）連歌興行せらるゝ時、いまだ定る法式なし。

（弁本）誹諧連歌興行せらるゝ時、いまだ定れる法式なし。

他本すべて九本に同じ。ここは俳諧連歌が初めて興行された時には

未だ定まった式目がなかったの意ととるなら弁本がよいようであるが、或は連歌が行われていた時に（俳諧には）未だ定まった式目がなかったの意であろうか。

（十）（九本・189四）又、先師の取合物との給ふは、曲輪の内外を分の給ふならし。

（弁本）先師のとり合せものとの給ふは、曲輪の内外をわかたずの給ふならし。

他本大体九本と同じである。九本と弁本では意味がまるで反対になり、問題であろう。この箇所の文意としては、弁本のごとく曲輪の内外を分けずにの意にとる方がよろしいように思うが如何であろう。俳書大系の板本には「分の給ふならじ。」となっているが、これは校訂者が意によって打消しに改めたのであろうか。

（十一）（九本・195四）角が俊哲寿才

（湖本）角が俊哲秀才

（板本）角が俊哲広才

（弁本）角が俊哲奇才

評本は湖本に同じである。一語の違いであるが諸本に相違が甚だしい。いずれをよしとすべきであろうか。

（十二）（九本・197四）晋子是を学ぶことなし。

（評本）晋子是を学ぶことなかれ。

（弁本）吾子是を学ぶ事なかれ。

湖本・板本は九本に同じ。この文は「又其角一日語テ曰…」とあるところであり、其角の言葉の文句と思われるので、其角の別号「晋子」では全くおかしいのである。これは文意からいって、絶対に弁本の「吾子……なかれ」でなければならない。それが書写の際に晋子と誤られて評本の形となった。しかし晋子では意味が全然通じないため、文末を上にあわせて「なし」と改めて、次第に九本の形に移行していったものと推測される。ここは弁本の形によるべきであろう。

（十三）（九本 197四・198四）又此比去人のかたより或人に文通有。其文曰、大津の木節・乙州等に会吟し、不易・流行を委しく習得て、誹口を開きたり。先に其角と去来と、此二ツを論ずるといへ共、是只浅見の事也と云云。右の人委〻伝受したりといへるは、いかなる事にや侍らん。時々の流行を一々伝受したると云事にや。夫は伝受に不及、ことに是を聞て俄に誹口を開たるといへる、尤覚束なし。……今許六の不易・流行に自縛するといへるは、右の人の如ク云ルものゝ事か。…

（弁本）又此比美濃の怒風がもとより素行に文通有り。其文ニ曰、大津の木節・乙州等に会吟して不易・流行悉習ひ得て大ひに俳心をひらきたり。先に其角と去来と此弐ツを論ずるといへども、是唯浅見の事也と云云。怒風悉伝授したりといへるはいかなる事にやあらん。時々この流行を一々伝授したりといふ事にや。それは伝授に及ず、殊是を聞て俄に俳心をひらきたりといふ、尤おぼつかなし。……今許六の不易・流行に自縛するといへるは怒風がごとしき徒か。……

去来が不易・流行について述べているところである。他本、語句に少異はあるが、凡そ九本と同じで、弁本のみ右に掲げたごとき異同がある。諸本に「去人」「右の人」「右の人」とあるのが「美濃の怒

風」を指し、「或人」というのが「素行」であることが弁本によって明らかになるわけである。

怒風は、『梟日記』によると、元禄十一年六月、九州を巡遊しており、又『今日の昔』（元禄十二年刊）入集の「崎陽より帰たる比、新そばに唐人口を広めばや　怒風」の句によると、長崎にも遊び、その秋に帰郷したらしいことが知られる。怒風が不易・流行を悉く習い得たなどという手紙を素行に与えたのはこの時のことであろう。それから怒風は翌十二年秋の頃に再び長崎に来たっており、『裸麦』（元禄十三年成）所収の野坡の「三夜興賦」によると、仲秋既望の夜、長崎に旅寝中の去来や野坡等と一座している。そしてこの長崎再遊の時、既に成立していた『旅寝論』の草稿を見て、これを筆写したらしい。穎原博士は、怒風所持本を転写した九大本の巻末に「卯菊月下旬写之ト本書ニ」とあるのを、この元禄十二年九月ではあるまいかと推定されている。以上のことを考えると、九本等の他本と弁本との相違が納得出来るようである。即ち元禄十二年、長崎にあった怒風は『旅寝論』の草稿（つまり弁本系統のもの）を見た。ところがその本文中に、自分が大津で木節・乙州等と会吟して不易・流行を悉く習い得た等と書いた素行宛の私信が引用されている。これは恐らく当の怒風にとって甚だ意外で困ったことであったろう。しかも其角と去来とが不易・流行を論じたが、是はただ浅見のことだというつい調子に乗ってもらしたらしい不遜の言葉までも引かれている。それで怒風は執筆者去来に自分の名を出さないように懇請したのではなかろうか。よし怒風の懇望がなかったにしても、怒風と俳席を共にし、親しい交わりを持つにつれ、怒風の名を表面に出し、「今許六の不易・流行に自縛するといへるは怒風のごとしき徒か。」ときめつけることが憚られたのであろう。かくて去来は草稿にあった怒風の名を伏せて九本等のごとく改めたと推測される。

（十四）（九本・201頁）是が為に付句の大数書出し侍れ共、
（評本）是がために付句の大数書付れ共、
（弁本）これがために付句の体、数条書出し侍れ共、

最後の「余評」のところである。板本・湖本など九本に同じ。前に「願は付句の体、書しるし示し侍るべきよしを望む」とあるので、弁本の方がよいようである。しかし九本でも意味が通らないわけではない。

三

以上、『弁篇突集』と他の諸本とを比較してかなり異同があって、問題になるような箇所のみを取りあげ、ごくあらましに考察を加えてみたわけであるが、これによって『旅寝論』の異本としてのこの『弁篇突集』なるものの性格が凡そ理解されたかと思う。『旅寝論』の諸本を調査された山崎教授は前述の論文に於いて、序文では、文中に許六・支考が加えられているものを草稿本、この両名が除かれているものを成稿本とされた。『弁篇突集』本は、まさに序文に於いては山崎教授のいわれる草稿本に属する。しかも、㈠・㈡で眺めたごとく、他の草稿本系統のものに見出せなかった二点を有している。勿論後人のさかしらとも考え難いので、これらの点に於い

て草稿本の中でも最も早い草稿となすべきであろう。次に本文に於いては、山崎教授は草稿本と成稿本との区別を文辞の粗密におかれた。『旅寝論』の諸本はいずれも脱文を有しているので、なお若干問題は残るが、『弁篇突集』は成稿本系統の九大本や板本に比べると全般的に文章が粗い。重厚が本書について「落字あるは誤字の多きを…」といっているのは、勿論転写を重ねて弘く行われた為の誤りもあるであろうが、すべてを転写の際の誤字や落字とはなし難く、寧ろ落字の多くは草稿本としての文辞の粗さと見做すべきであろう。それに㈣で指摘したごとく、本書のみ質問者の名前を記しているが、それも全部にわたってではなく、半ばまでぐらいの不備な形である。これは執筆途中から質問者の名を掲げることを思い止まり、後に再稿で他本のごとく省いてしまったものと推測される。次に㈢のごとく、本書のみ文中に怒風・素行の名が記されてあり、これも前述のように怒風との関係によって、後にその名前を伏せてしまったのであろうと推定されるわけであるが、これらのことから筆者は、『弁篇突集』本を『旅寝論』の諸本の中で最も早い草稿本であろうと推量している。

かように本書は『旅寝論』の現存諸本の中でも他本に見られない特徴を有しており、又他本の誤りを正すことの出来るところもあって、軽視し得ない伝本の一つと考えるので、爰にあえて拙文をつらねて紹介の筆を執った次第である。

（一九六〇・一二・三一）

（注1）岡田利兵衛氏等によって『連歌俳諧研究』（十号）に翻刻されている。のち研究史大成『芭蕉』にも所収。

（注2）『篇突』と『旅寝論』の関係については拙稿「『旅寝論』と『去来抄』」（『太白』昭和二十九年十二月号）に於いて述べたことがある。

（注3）この本を筆写した居鳳について、頴原博士は岩波文庫の解説で、本書が日田の千原家から出たもので「恐らく同家の何代前かの先祖であらうと推定されて居る。」と述べておられる。しかし日田では享保頃居鳳なる俳人を見出し得ない。ところが本書の巻末に松梅堂と記され「居風」の印がおされている。風は風と同字である。とすると居鳳と居風は同一人と思われる。（日田の風岡と鳳岡も同一人であることも参考になろう。）居風なら丁度この頃の俳書『柴石集』（享保十一年刊）『水仙伝』（同十三年刊）等に入集していて、豊前成恒の住である。多分この居風が九大本を筆写した人であろう。

――鹿児島大学助教授――